

# 社会的協力に必要な愛智の基礎

藤川吉美

## 1. 愛智の探究と人権意識の芽生え

古代ギリシャの政治家カリクレスは当時の一般常識を「優れた者が劣った者よりも、また有能な者が無能な者よりも多くをつかむのは正しい。正義というのは、常に強者が弱者を支配し、強者が弱者よりも多くのものをつかむことである。牛でも何でもそうだが、力の弱い劣った人のものすべてが力の強い優れた人の所有に帰すわけで、これが正義本来の姿である」と断言して弱肉強食のジャングル状態を容認した。

これに対しソクラテスは「平等な分け前を守ることが正義であり、他人のものを侵すことは正義ではない。…平等な分け前を守ることが正義であるのは、法律や習慣上のことではなく、自然本来においてそうであり、…これが自然の声であり、神の声であり、良心の声である」と反論しました。すでにソクラテスは「人権意識」に芽生えていたのです。

17～18世紀（英）経験論者ロックや（仏）合理論者ルソーより遙か以前に社会的協力の仕組みに必要なこと（デモクラティアの理念と共通ルール）を議論していたソクラテス、プラトン、アリストテレスら愛智者の秀でた叡智と先見の明には驚嘆を覚えます。というのは、彼らの叡智で学術的な根拠を重視する万学の源「愛智<sup>(1)</sup>」が誕生して伝統的な呪術的で魔術的な発想から解放され、合理的で実証的な知の枠組みへとパラダイム転換して古代ギリシャは急速な発展を遂げ、紀元前500年頃には黄金時代を迎えてヨーロッパ屈指の学問と文化の最先端を誇っていたからです。

しかし緊急に解決を要する頭も痛い課題もあってそれは強敵ペルシャ軍の本土襲撃（①前490年マラトンの戦いと②前480年サラミスの海戦）でした。どうすればジャングル状態の戦闘をなくし、平和共存を達成できるのか。これが愛智者らを悩ます一大問題でした。彼らはペルシャ軍の攻撃に反撃で応じるなら報復合戦が永続し、悪循環に陥ること必至で、愛智によってこの問題を合理的に解決する方策の模索を始めたのです。

愛智者は①命題「生きるために戦う」は②命題「戦うなら生きていける」( $F \supset L$ )と等値（意味が同じ）であることを知っていました。しかし、現実はその甘くなく③命題「戦っても生きていけない」( $F \supset \neg L$ )ということも真実です。すると、命題②と③は互いに矛盾し、ジャングル状態のディレンマに陥る。そこで、互いに矛盾する②命題「戦うなら生きていける」( $F \supset L$ )と、③命題「戦っても生きていけない」( $F \supset \neg L$ )とを前提とすれば、④命題「「戦うなら生きていける」かつ「戦っても生きていけない」ならば「戦わない」」( $(F \supset L) \cdot (F \supset \neg L) \supset (\neg F)$ )といった結論が導かれる。これ

(1) ソクラテス (Sōkratēs 前470～399) の命名した「愛智」(philosophia ≡ philein · sophia) は日本では西周によって賢哲（名智）の原意に忠実に希哲学と訳され、「哲学」となった。

を「帰謬法」(reduction ad absurdum)と名付けた。

こうして結論となった命題④「生きるためには戦わない」は、原初命題①「生きるために戦う」の否定命題であります。ソクラテス率いる愛智者らはこの帰謬法によって、命題「生きるためには戦わない」という正義の原理、換言すれば、「戦わずして生きる」ために必須不可欠な要件「公正な社会的協力の仕組み」の謎を提示したのです。LKによる証明：ゆえに命題④は真である。

$$\begin{array}{c}
 \underline{F \Rightarrow F} \qquad \qquad \underline{L \Rightarrow L} \\
 \underline{L \Rightarrow \neg F, F(\Rightarrow \supset) \quad \neg L, L, \Rightarrow \neg F(\supset \Rightarrow)} \\
 \underline{F \Rightarrow F} \qquad \qquad \underline{F \supset \neg L, L, \Rightarrow \neg F} \qquad (\supset \Rightarrow) \\
 \underline{F \supset \neg L \Rightarrow \neg F, F} \qquad (\supset \Rightarrow) \qquad \underline{L, F \supset \neg L \Rightarrow \neg F} \qquad (I \Rightarrow) \\
 \underline{F \supset L, F \supset \neg L \Rightarrow \neg F} \qquad (\supset \Rightarrow) \\
 \underline{(F \supset L) \cdot (F \supset \neg L) \Rightarrow \neg F} \qquad (\cdot \Rightarrow) \\
 \Rightarrow ((F \supset L) \cdot (F \supset \neg L)) \supset (\neg F) \qquad (\Rightarrow \supset)
 \end{array}$$

こうして私たちに課された課題は、持続的な平和共存を可能とするための社会的協力の仕組みに向けた謎解きでした。これにどう取り組んでいくべきか、私たちは互いに存在を願い、互いに価値を尊び、互いに利益を配慮しながら、自尊心を充たし、助け合って生きる正義に合った仕組みと合意形成による「平和の実現」に夢を託したわけです。もしこの謎解きに成功を収める智慧があるなら、人類は永続的に生きながらえるでしょう。しかし、教育を誤り、ジャングル時代の迷妄を現実とし悪徳を美徳とするなら、此の世は忽ち魍魎魍魎の伏魔殿と化し、Do as they do do.の叫びも儚く一瞬にして人類の時代は、終焉に帰すでしょう。

## 2. ソクラテスの愛智と弁証術（問答法）の構築

都市国家 (polis) アテネに民主制 (デモクラティア) が定着したのは、聡明なペリクレスがその理念と共通ルール「アテネ市民憲法」施行へと市民を導き黄金時代を迎えたからです。彼は応用科学、建築、造船、天文など技術革新にも大きく貢献し、ラヴリオン鉱山の活用や海運業にも頭角を現し、地中海全域の政治／経的／社会／文化の主導権を掌握し、愛智と問答法によって市民が高度な才能を引き出すのに最適な「民主制」の下で公正な社会的協力を展開し、発展の基盤を揺るぎなきものにした。

ソクラテス (前470～399年) は弱肉強食の不平等を正当化するカリクレスの強者正義に反対し、「平等な分け前」<sup>(2)</sup>の正義を実現すべくデモクラティアの社会的協力の理念と共通ルールの要件とを説いたが、ソクラテスの「平等な分配の正義」に警戒心を煽る支配層も

(2) Pratoñ, *Gorgias*, 39, c, d. を参照。

いた。しかし、法を根拠づける正義の意味を平等な分配に求めたソクラテスの勇氣は、歴史に深く影響を及ぼす画期的な出来事で、古代デモクラティアの最大の「パラダイム（思考枠組の）転換」であったと言える。

ソクラテスはソフィストの一人でしたが、授業料をとって学ばせることを潔しとせず、真理の探究へ迫る愛智の弁証術<sup>(3)</sup>を教育方法論とした第一人者でした。往時アテネは衆愚政治への批判も彼方此方で騒がしく、陶片追放が功を奏していました。恐妻クサンティッペから見れば、夫ソクラテスは家にパンでなく悪名を持ち帰るやくざな怠け者でしたが、裕福な弟子プラトンやアルキピアデス、師の貧乏生活に魅せられ入門したアンティステネス、上下の隔てなく自由で陽気な師匠の魅力に魅かれて入門したアリストイッポス、エウクレイデスもいて胃袋は満腹でした。

アテネと対照的なスパルタ教育のように、問答無用で教え込むのではなく、対話によって相手が自ら「真理」へ接近し、不確実な知識から確実な概念へ近づいていく手助けをすること、これがソクラテスの産婆術／弁証術／問答法でした。今日のカリキュラムやシラバスなどで縛られた授業ではなかったにせよ「リベラル・アーツ」を基本とする対話形式の講義内容の水準は確かに「大学レベル」であったのです。彼はすべての人の叡智を合意形成によって活性化させ、愛智（知を愛する）をアカデミズムの基礎に据えたのです。貧窮ゆえに、いつも皺くちなチュニカを纏<sup>まと</sup>って古代アゴラ辺りで弟子らを集め「ゼウス・エレフテリオス神殿」の回廊を廻りながら、概念の定義や信念の前提を問い、「問答法」や「弁証術」を用いて自己矛盾に気付かせ、自己の無知を自覚させて物事の正しい概念へと導き、真理の探究に迫る教育方式を生みだした。こうしてソクラテスは、対話をつうじた「合意形成」によって智慧を出し合う民主的で自律的な社会的協力の構築に努め、それを推奨した愛智者の元祖だった。

クレイステネスの政治改革（前508年）以後、アテネは段階的に僭主制から貴族性を経て民主制へと移った<sup>(4)</sup>。しかし自由や富の分配は酷く偏りを呈し、貧富の格差は増える一方だった。アテネの政治は腐敗が進んでいたのです。なぜか。ソクラテスはその原因と解決策を求めたのです。つまりその原因はアテネの政治的な腐敗と道徳的な墮落にあること、言い換えると、最も肝要な「己自身の靈魂」を「名誉や財産や肉体に従属させるという主客転倒」の誤謬にあることを突き止めた。こうして、解決策として「汝自身を知れ」と諭し、汝の自尊心を高潔に保ち、靈魂の善性と徳性とを体得しなければならない、と説いたのです。

### 3. 民主制の腐敗とソクラテスの冤罪死

ソクラテスは、都市国家アテネの「政務審議会」執行委員として「公正な裁判」のために活躍していた。往時の「裁判記録」によると、ソクラテスは以下の事件を取り上げ、政府を追及している。

(3) ソクラテスは弁証術 (dialektikē) を教育の新たな方法論として導入した。

(4) Praton, *Respublica*, 561, d. 「僭主制」 (tyrannēi) は、武力で王位を奪い帝王を僭称する独裁者であり、「君主制」が功名心や私欲に誘惑され、本務を忘れて墮落し腐敗した政体。「貴族性」と民主制との過渡期にも出現しがちである。

① 前406年、「アルギヌウサイ島沖海戦」で漂流者を放置した罪に問われ指揮官10人が死刑を言い渡された事件を取り上げ、判決に手続上問題ありとして厳しく抗議した。

② 前404年、「30人政権」首領クリティアスが卑怯にもスパルタと手を組み、反対派を粛清した事件の真偽を取り上げて糾弾した。

③ 前403年、前年スパルタと共謀して反対派を粛清した30人政権首領のクリティアスの恐怖政治に怒ったアニュトス一団は、「ペライエウス海戦」でクリティアス軍を破って首領を戦死させた事件の真相を糺した。

④ 首領の戦死で30人僭主政治は崩壊し新首領アニュトスの下で民主制は復活の兆しを呈していたが、極度に腐敗し墮落した衆愚政治が最悪の事態に陥っていたから、アニュトスは心穏やかならず、下手すると新政権が危ういと危機感を募らせはじめた。

⑤ 前399年、民主制を掲げて当選した新首領アニュトス政権にとっては、聡明で鋭い論理を展開するソクラテスは、眼の上の瘤と思わせるほどに戦々恐々でしたので、政権派のメレトスはソクラテスに対する悪意に満ちた罵詈雑言を耳にしたとし、世論も芳しくないとして、ソクラテスに濡れ衣を着せ、アテネ審問所に告発したのです。

⑥ 訴状でソクラテスは「国の定めた神々を認めないでダイモン（新奇な鬼神）の祭りを挙行し、青少年に害毒を及ぼす罪を犯した。よって死刑に値する」と求刑を行った。これは明らかに「論点すり替え」の冤罪でした。

⑦ 「アテネ審問所」は市民から選ばれた陪審制をとっており、ソクラテス裁判では、この重大性に鑑み、『史書』によれば、陪審員500名が評決に加わる異例の大法廷でした<sup>(5)</sup>。

⑧ 新首領アニュトスの証人尋問では「息子がソクラテスに弟子入りした後、父親を侮蔑し、父が信ずる神々に背き始めた。…ソクラテスは革命派の知的指導者で、青年らに害した張本人である」と政治的な畏怖を煽る臆面もなく辛辣な事実に反した「論点すり替え」の証言を行いました。

⑨ この証言で多数の陪審員がソクラテスに怒号を浴びせかけ、有罪の評決に回ったものだから、原告メレトスの求刑どおり、ソクラテスは「死刑」の判決が宣告された。

⑩ プラトンなどの多くの弟子は、師ソクラテスに対し脱獄を勧めましたが「民衆の方々に哀れみを乞いたくない」と拒み、海外逃亡の勧めに対しても「幸福実現には、法の遵守が正しい。不正を犯した者は患者自ら医師に掛るよう大急ぎ裁判官へ足を運ぶべきだ」と断りました。

しかし陪審員500人の判断は公正だったか、濡れ衣を着せ冤罪を生みだす悪法をも遵守すべき価値があるのか。愛弟子プラトンなど弟子たちの心境は複雑でした。ソクラテスが獄中で毒杯を仰ぎ<sup>(6)</sup>、71歳で悲壮な死を遂げたとき、まだ、プラトンは師の冤罪を嘆く28歳の青年でした。往時の民主制は統治者らの利益欲によって次第に墮落し、悪徳が蔓延<sup>はびこ</sup>ってゆく「衆愚政治」(demagogie) になり果てていたが、プラトンはアテネの溺れゆく「民主制」に愛想をつかし憎悪と侮蔑の念を抱きつつ未来の「理想国家」を求めて流浪の旅に出たのです。

(5) デイオゲネス、ラエルティオス『史書』第2巻、第10節を参照のこと。

(6) Platōn, *Gorgias*, 36, b を参照のこと。

#### 4. プラトンの理想国家と学苑「アカデメイア」の創設

師ソクラテスの死亡で心に受けた傷は大きく、脱獄を勧めたプラトンにも身の危険が迫った。そこで友人らの勧めにより前399年に、まずエジプトへ渡ってナイル河流域の先進文化に触れた。以後シチリア島やイタリア本土に渡ってピタゴラス学苑のアルキュタスと共同研究を推進し、『イデア論』や『国家』など理想国家論の基礎を固めたのです。

師ソクラテスは法の遵守こそ善と正義に適うとしたが、プラトンは悪法も法と言えるか、濡れ衣で冤罪を生み出す悪法までも遵守するに値するのか、腐敗した民主制ゆえに、陪審員の判断は公正でなかった。この問題を廻ってプラトンの心境は複雑でした。師ソクラテスが獄内で毒杯を仰いで71歳で悲壮な死を遂げたとき、プラトンは師ソクラテスの冤罪を嘆き、「アテネの正義を基礎に権力者の奴隷という足枷に屈服して倫理的に荒廃させる国家秩序に従うより追放を望む」とし、「理想国家の正義を実現するには、まず統治者が自ら正義の徳を備え、市民も徳を備えるよう指導する任務を負う」として、統治者の基本的な任務、要求される資質、受けるべき訓練は極めて厳しいことを悟りました。

しかしプラトンが逃亡の旅に出て12年後（前387年）に大騒動が発生したのです。シチリア島に入ってシュラクサイ王デオニュシオスから「わが国をユートピアにして欲しい」と要請され、プラトンは応じたが、当の専制君主デオニュシオスは、その後、困り果てていたのです。なぜなら、プラトンの「理想国家」では王自身が愛智者になるか、でなければ、王座を手放すかでしたが、愛智者になる能力はなく、かといって、王座も手放したくない。王はディレンマに陥ったのです。なお困ったことに王妃アリストマケの兄弟ディオオンがプラトンの人物と愛智に魅せられ、母国シュラクサイ人の生き方や考え方に批判的になったから激昂し、遂にデオニュシオス王はプラトンを「アイギナの奴隷市場」に売り飛ばしたのです。しかしエピクロスも言うように「もつべきは友」、幸運にもソクラテスの学徒で親友のアンニケリスに買い取られ自由の身になり、王の奸策は失敗に終わった。

アテネに帰国後プラトンはアンニケリスに身代金立替の返済を申し出たが、拒まれたので、その金で「ヘロス・アカデミコス神殿」域の庭園を購入し、前387年（40歳のとき）師ソクラテスの意思を継ぎ真正の民主制を樹立するための学苑「アカデメイア」を創設しました。この学苑はキャパスも校舎も学則も整った世界最初の大学の威厳を誇り、男装した女子学生（テストネイア、アキシオテア…）も混じっていました。

この学苑は師ソクラテスの辻説法と違って入学定員や選抜試験のルールを定め、男女や階層を問わず高邁な愛智の精神、強靱な意志、卓越した指導力、勉学の意欲、気高い品性、強い正義感、旺盛な真理の探究心、学術の情熱、勇気と節制、卓越した記憶力や分析能力、責任感や判断力等を総合的に審査し将来の可能性に鑑みて評価し、将来、「理想国家」を担うに必要な素質や能力を引き出すべく門の上には「幾何学を知らざる者入るべからず」という看板を掲げていたという。

そして「アカデメイア学苑」のカリキュラムは師ソクラテスから受け継いだ「愛智」、「産婆術」(maeutike)、「問答法」(dialektike)の「共同研究」方式でしたが、プラトンが考案した「イデア論」や「理想国家」や一般常識として数学、幾何学、天文学の他、詩学や音楽などの「リベラル・アーツ」を開講していた。その理念や目的は、術学的な物知りや世渡り上手なお利口さんを育てるためではなく、自ら真理に迫り、永遠の相の下に、将来

のアテネほか世界のデモクラティアを背負う品性豊かな指導者の育成にありました。

学苑教師は学生に知識を強制的に教え、暗記させる方式を取らず、互いに真理の探究者として尊重し、問答法（弁証術）によって対話を通じて共に探究し、共に学ぶ学習法を採用した。最高の認識や理解は共同研究（collaboration）や共同生活で飛び散る火花に点火した灯火のように突如精神内に宿り、その後は、自己の力で自ずと養われていく方式であり、教えるのではなく、共に学ぶ。対話と共同研究によって自ら学ぶ。これこそは学苑「アカデメイア」の伝統だったのです。

創設者プラトンは紳士淑女の要件として重厚、礼儀、勇気的美徳と教養と心身の健康（wellness）を尊び強制を禁じていた。「教育」（educatio）の語源は、「引き出す」（educō）を意味する。それゆえ、アカデメイアの教育原則はとくに初等教育は「遊びながら楽しむ場」にすること。子供に知識を与えるにせよ強制はいけない。強制されて覚えた知識は身につかないから、でした。

学苑「アカデメイア」は独立自尊の学風を有し、財政的には豊かでも国家への依存は禁物としました。したがってアテネ政府は、学苑には干渉をせず政治的中立を守り、ゆえに創立以来916年間も存続し続けたのであって「学苑の自治・独立」と「学問の自由」も健在であった<sup>(7)</sup>。

プラトンは、統治者が本務を忘れ、私欲に奔ると、

1. 君主政治が本務を忘れ私有欲に奔ると、僭主政治（tyrannie）に陥り、
2. 貴族政治が本務を忘れ搾取欲に奔ると、寡頭政治（oligarchie）に陥り、
3. 民主政治が本務を忘れ利己欲に奔ると、衆愚政治（demagogie）に陥る、

と警告した。プラトンの正義は政体中立的でない。「理想国家」は下記の条件①～⑤を充たす「社会的協力」である、と考えた。

- ① 非世襲の君主政治（君主制）の形態をとる愛智の統治とする。
- ② それぞれの人に価値相応の分配（価値に応じた平等な分配）を実施する。
- ③ 各人が都市国家ポリス・アテネ全体と有機的に統合して調和を保つ。
- ④ 智慧（理性の徳）、勇敢（勇気の徳）、節制（欲望の徳）が有機的調和を保つ。
- ⑤ 自然・社会・人間の三秩序一体の調和を最高の正義とする。

各人がこれら「理念」と「共通ルール」の下で、自律的・自発的に社会的協力を従事しているとき「理想国家」の成員とされる。かくて愛智の統治の君主政治を結論としたが、ではなぜ、プラトンは民主政治を理想国家としなかったか。その解は明快。アテネの民主政治は未熟で時期早々。権力陶醉が誇大妄想に陥るなら、自由は崩壊するし、まだ正義の実現は困難だと考えたからでした。また、搾取階層を設けて自己の懐を肥やす富者のための政治に陥りがちな貴族政治も斥け、精神錯乱の輩は傲慢にも人間ばかりか神までも支配できると思い込み、一旦、国家権力を手に入れると血を啜るライオンのごとく国民を奴隷とし反抗する者の関心を他に逸らせるため戦争を企てるという悪智慧を用いて良民を脅すことになる。真実を洞察できる明敏な秀才にも警戒を怠らず、時期を窺がって肅清の口実と手立てを策謀する。その典型的犠牲者はソクラテスだった。

アカデメイアは916年間続いたが、歴代伝わる輝かしい愛智の精神とその伝統、すべて

(7) 紀元後529年、東ローマ皇帝ユスティニアスによって閉鎖された。すべての教育は教会と修道院に委ねられたから。

の人にひそむ可能性を引き出す問答法、徳や最善のポリスはか哲人統治の理想国家などアカデメイアの業績や学風や伝統は世界に羽ばたく多数の先輩によって末永く受け継がれた。アカデメイアから飛立つ民主制の政治、経済、社会、文化の多様な花咲く愛智の大地は世界に限なく広がって今では権威を象徴する対象は「アカデミー」と呼ばれるに至った。

## 5. アリストテレスの世界国家と学苑「リュケイオン」の創設

アリストテレス（前384～322）は18歳で学苑「アカデメイア」に入学、卒業後も学苑に残って師プラトンの大往生（前347年、80歳）まで20年間、この学苑で教鞭をとり、学術研究に従事しました。師プラトンは弟子アリストテレスを「アカデメイアのヌース（叡智の化身）」と讃える一方「母親の乳を吸い尽くし足蹴にする仔馬」と評し、アリストテレス自身も「私は師プラトンを愛しているが、それ以上に真理を愛している」と応じていました。

両者の考え方は、アイデアの普遍性について対照的、プラトンは理想主義的、ミュトス的、芸術的、直観的でしたが、アリストテレスは「常に事実へ帰れ、自然の常若の顔をみよ」という通り現実主義的、論理的、実証的、科学的であり、その違いは決定的でした。プラトンは「普遍的なもの」こそ永続的で普遍的ですが、これに対し「個別的なもの」は、寄せては返す大海の小波のごとで、個人は生まれ後に死すが、アイデア（eidos = 形）の人間は永遠の存在である、と考えたのです。

アリストテレスは師の学説に反対し、「普遍」とは個物から抽象化された主観的な観念で思想の中に存在するのみ。知覚できる限りの客観的実在者は単なる個物に他ならず、(英) ホワイトヘッドも指摘する通り「抽象的観念を具体的存在とする誤謬」に他ならぬとしました。この立場では「個物よりも普遍を愛する」とのプラトンの考えは「主客転倒の誤謬」です。『国家』も然りで、その成員は台無し。国の守護者は「婦人と子供の共有が望ましい」という。誰しも然りだけど、家庭生活を断念すべきなら、人間の最高の価値まで失う。もし万事が万人に属するなら、誰が何のために懸命に努力するというのか。自ら服従を学んだ者だけが命令を下せるのです。

紀元前5世紀デモクラティア全盛のアテネには世界初の智を愛する叡智の華が満開となり、問答法で名高いソクラテスは愛弟子プラトンを生みだして万学の基礎：愛智学を世界に広げ、プラトンは愛弟子アリストテレスを生みだし、全人類に「学問の根拠」<sup>(8)</sup> (科学的根拠) を求めました。

普遍論争で対立したアリストテレスは後にプラトンから離れ、理性の法則「論理学」(三段論法)と経験的な「証拠」(自然学、博物学、天文学…)を立証する研究に専念しました。プラトンはポリスの基礎となる社会的協力の仕組みを理念と共通ルールの「正義」に求め、各成員が自律的・自発的に本務を果たし、本来、自己に属するものを所有するときに限るとした。国家の不完全な要素たる個々人も、適正な配置によって有機的全体に参与し、有

(8) 当時はまだ「科学」(scientia, 英仏 science, 独 Wissenschaft) という用語はなかったが、経験的根拠を欠く神話的迷信や感性的憶見に対して理性的認識を広く意味し、世界の法則について系統化された論証的認識や経験的根拠に裏付けされた認識を意味する。その意味ではすでに古代ギリシャの愛智の開祖ソクラテス、プラトン、アリストテレスらも科学的根拠を重視した「科学的認識」の嚆矢であった。

機的調和の統一的全体として「理想国家」を構築すれば、資質の不均等も社会的協力・分業を正当化する根拠となる。また適正な応分を定義し、正義を実現すれば国家の構造全体に個人の自然徳性が充ち溢れるという。

ゆえに、協力の仕組みの最重要課題は、各人をいかに適切に配置するかで、けっして国家の正義実現が必然に政体のあるべき姿を定めない。政体はどうであろうと、正義の要件を充たす社会秩序は正しい、とした。君主制でも、貴族制でも、民主制でも関係はない。こうして「正義」は選ばれた政体とは無関係（政体中立）である。

プラトンの死（前347年）後アリストテレスは学苑「アカデメイア」を辞しその分校的学苑「アッソス」を創設、同僚らと弁論術、雄弁術など現実的、論理的、実証的な学科を中心に3年間にわたり教鞭をとっていたが、廃校となった<sup>(9)</sup>ので、前342年マケドニア王フィリポス二世からアレクサンドロス<sup>(10)</sup>王子（13歳）の帝王学の教育係に任命され、とくに、都市国家（ポリス）から世界国家（コスモポリス）への歴史的趨勢について詳説しました。その講義はアカデメイア学苑時代の伝統に基づくカリキュラムを中心に問答法（弁証術）、雄弁術、政治学、都市国家アテネの国政、命題論、範疇論、形而上学、ニコマコス倫理学、詩学など学術全般の現実を踏まえて論理的、倫理的、実証的、体系的に学ばせた。アレクサンドロス王子（13歳）は遅しく成長し、興味は大変旺盛で鋭い洞察力、父親に優る先見の明、卓越した叡智、激しく豪快な気質を備え、師アリストテレスの理性の手綱は荒々しい野生的な王と蛮族の血が流れる王妃との間に生まれた王子ゆえに、代々受け継がれてきた激しい気性を抑えるのに苦労した。王子には、とくに「ギリシャの自由を尊重する文化」と「寛容の精神」に敬意を払わせた。

その後、アリストテレスはアテネに戻って前335年（49歳）アテネ東部の「アポロン・リュケイオン神殿域」に学苑「リュケイオン」を創設し、以後12年間、教育研究や著述活動に専念したが、この学苑はアイデア論、思弁哲学、政治哲学を重視した師プラトンの学苑とは違って各種の個別科学を重視する学風があり、形而上学、数学、宇宙論、自然学の他に三段論法、論理学や政策技術の方法論も含み、ニコマコス倫理学、経済学、政治学、文学、詩学、音楽などリベラル・アーツの実践学まで開講していた。

アリストテレスは「性格を形成するのは環境」とし、環境（友人、書籍、職業、娯楽…）を選び将来の己の性格を選べば自由になれる。最高の環境を提供し、学生の自律性、自主性を尊び10日毎に管理委員を選挙で決めて学生自身が必要なルールを造った由。ヨーロッパ全域から集まった学生は、教授と共に食事を取り歩廊を逍遙しつつ<sup>うか</sup>勉学に励む（ペリパテコイ）。こうした環境造りに学苑「リュケイオン」の建学の精神が窺がえよう。

アリストテレスの歴史上の特徴は、プラトンとは違った正義概念の定義にあり、「正義」を政体中立な一般的正義と特殊な正義に、また後者は配分的正義と調整的正義に区分します。その特徴は「調整的正義」の導入にあって随意交渉（雇用、売買、賃貸、質入上の利

(9) 学苑「アッソス」はアッソスのアタルネウス王のヘルミアスを訪ね、アカデメイア学苑の分校創設を依頼し、発足したが3年後、不幸にもヘルミアスがベルシャ軍に捉えられ捕虜となったので、財政上の理由から廃校に追い込まれた。

(10) Alexandoros. (前356~323) は、マケドニア王のフィリポス二世 (Philippos II, 前59~336) の王子、アリストテレスが教育係に就任して7年後 (王子20歳)、ベルシャ軍のヨーロッパへの進出を防止すべく「ベルシャ遠征」を計画中に暗殺され急遽アレクサンドロス大王が王位後継者に決まった。

害得失を平等に調整)、不随意交渉(犯罪、不法行為上の加害者と被害者の利害得失を平等に調整)に正義を欠くと公正な裁判も取引も望めず、統治者の恣意や力の正義が介入し干渉する危険性が生じる。これら正義が混然一体となって調和のある秩序を生み出すとき、**正義は実現する**。このように国家が正義を実現するには、プラトンに似て、国家による国民の指導が必要となり、アリストテレスの場合、ポリスやコスモポリスの意義は功利性や血腥い権力闘争ではなく、美しい事蹟や幸福な美的生活の倫理的な偉大さに求め、国家は「正義」を実現する「神聖な目的」を世界秩序<sup>(11)</sup>から得ているとする。

アリストテレスは「人間は生まれつき政治的・社会的な動物である」とし「倫理学は自然学に依拠する」とする。なぜか。人間は家庭から村落共同体をへて国家結合へ至る。ゆえに、徳の根拠は理性でなく自然に存し、国家的結合は自然的衝動。自然を必要としないのは神か動物である。人間にとって国家は自己に潜み内在する形相。ゆえに、個人にとって現実態だが、個人は国家にとって可能態。全体は必然的に部分に先立つから、国家は本性上家族や個人に先立つ存在である<sup>(12)</sup>。国家は教育と賞罰を用いて国民の徳を完成へ導き、個人を有徳な人間に仕立て上げ、己の倫理秩序が自然秩序と融合する統一的世界秩序との調和を指導原理に、神聖な一つの世界秩序と調和すべく正義実現という目的の達成を図るのである。

プラトンは哲人統治のために君主への過酷な条件：①善のアイデアを観照し、②一連の心身の訓練に耐え、③夫人と財産の共有に耐える条件を課したが、アリストテレスは彼の理想主義に反対し、統治者であれ人間に違いはなく、家庭生活の断念は、人間の高貴な価値である夫婦愛、親子愛、善意、信頼、自制心、相互敬愛を失って唯の性的淘汰の關係に陥る。すべての事が万民のためにある状態では、他人のものや自分に関係ないものに配慮を注ぐことは望めない。本来財産の私有自体が悪なものではない。無節操な利得や無節度な所有形態が悪だから、神聖な一つの世界秩序との調和を求めるわけ。財産の私有は、節度を忘れがち故にである。しかるに、過大な富は、浪費や傲慢や圧迫など人々を無法へ誘導する。それに対し、極度な貧困は、野卑な根性や不平や不満など、腐敗や内乱の原因となって共に正義は望めない。こうして、富裕層の傲慢や吝嗇と貧困層の不平や不満が同居する社会では、圧迫や反乱、墮落や腐敗などの悪循環に陥らざるを得ない。そこで、国家は財産の適正な所有を整え、利益の公正な分配を達成しなければならぬ。統治者も例外ではなく、社会的協力は各人の本性に合った仕組みが尊ばれる。

アリストテレスはプラトンの「理想国家とその制度」を不自然なものとし自然の法に反する制度は永続し難いと考えた。では、自然の法に合った制度とは何か。そこが問題だが、それを見抜く特別な資質をもった者には特別な権利を認め、同等な資質をもった者には同等な権利を認める。しかし資質は父と子の間でも同等である保障はなく、違うのが自然であるから、指導的な地位の世襲には合理的根拠はなく、世襲は自然の法に反する。自ら服従することを学んだ者だけが命令を下しうる。

こうしてアリストテレスは、プラトンの有名な *Politica* 『国家』における「世襲制批判」を擁護した。しかし、プラトンの哲人統治は現実的でなく、善のアイデアを観照しているか否かは、一体、誰が何を根拠に決めるというのか、また誰に資格審査権があるのか、複数

(11) Aristotelēs, *Ethica Nicomachea*, 1281, a, 2, 『ニコマコス倫理学』高田訳, 3-7他。

(12) Aristotelēs, *Ibid.*, 1253, a, 2,

の人が有資格者である場合に誰が何を基準に合格決定を下すのか、判断を下しようがない。両者を隔てる相違点は沢山あるが、アリストテレスは学苑「リュケイオン」の初代学長として12年間勤務し、その間、図書館の建設とか、愛智、愛智史、論理学、倫理学、医学、歴史学、年代史、政治学、言語学の研究や百科にわたる資料の収集にあたり、幾多の子弟を指導した。学苑「リュケイオン」の建設費や設備費は自ら準備したが、親戚の政治家やアレクサンドロス大王から総額800タレント（\$500万）の支援を受け入れるほど財政は逼迫していた。

## 6. 今日でも愛智は生かせるのだろうか

古代ギリシャの「問答法」は、過去の遺産として博物館の棚に並べられているものではなく、活用すべき価値を潜めている。とくに、重大問題に直面したとき、問題解決の智慧と方策とを与えてくれる。高度情報化時代がきて生産手段に大きな変化が生じようと、また、過去の政治体制が国境を超えて広がるグローバルな時代に対応できなくなっても、それゆえにこそ、これを現代社会に生かす叡智が与えられる、と思われる。

今日の「社会的協力」の最適な仕組みは何か、14～15世紀のルネサンス、15～16世紀の宗教改革後に「天才の世紀」とされる17世紀イギリス経験論の創始者F.ベーコンの傲慢な「自然を征服し支配せよ」に従った自然破壊の現状、20世紀の愚かな第一次・第二次世界大戦、核使用による大虐殺、その後の野蛮な大戦争、21世紀に発生した経済格差の拡大とそれに伴う9/11のニューヨーク貿易センター等へのテロ攻撃、さらに、世界への核拡散、自衛目的を口実とする核弾頭ミサイルの製造、安全神話が壊れた3/11の大地震・大津波・原子力発電所の崩壊危機など、すでに一国では対処不能な前代未聞の重大問題ではないだろうか。

加盟国に経済格差と権限格差が多くみられ、ややもすると「力の正義」に陥りがちな「国連」でさえ解決困難とされる問題が増えてきた。まず国家の使命は、「国民一人ひとりの生命財産を守る」に求められた古代ギリシャのデモクラティアから学べるとは言わないまでも、先見の明に富む先輩たちの「愛智」に学べはしないか。「第二次世界大戦」の産物で戦勝国に好都合な「国際連合」の諸難点を取り除いた「世界連邦」に途を開くことはできないものか、などなど。以下、ヒントを列挙したいと思う。

1. ソクラテスは愛智の問答法（弁証術）により市民の頭を耕し（クルツス⇒カルチャー⇒文化）、社会的協力の仕組みに平等な分け前の正義と人権の平等を加え、アカデミズムに基礎づけられた「発想転換」を求めました。魂を売らない心身の主客転倒なき美德に秀でた聡明なリーダーは、市民一人ひとりの才能や個性が「自由と平等」の大地の下にデモクラティアの花を満開にする努力を怠らないとき、そのときに限り、持続可能な社会的協力は健全に発展する。こうして「衆愚政治」に陥る心配はいらないと考えた。

2. プラトンは師ソクラテスの冤罪と獄死からポリスの理想国家に必要な社会的協力の理念と共通ルールにイデア論と哲人統治の帝王学と正義論を導入し、万学の普遍的・合理的な幾何学的な基盤を築きました。プラトンの精神主義・厳格主義は後に教会の聖職プロフェッサー（教授）やストア学苑の開祖ゼノンの普遍的な「ロゴス論」や「万民平等論」や「理想国家論」に引き継がれ、真のリーダーに求められる「智慧」（理性の美德）、真の

防衛者に求められる「勇敢」（勇気的美徳）、「節制」（欲望的美徳）の重要性を修得するなら政治に私欲を挟まず、本務を忘れず、このようにして、僭主政治や寡頭政治や衆愚政治は避けられよう。

3. アリストテレスは、師プラトンとの普遍論争を通じて具体的・経験的事実からの「抽象化・抽象作用」を学び、社会的協力の仕組み（理念と共通ルールと合意形成）には政体中立の正義概念を導入すべきとし、先見の明により「世界国家」（kosmopolitina）の到来を予測し、その理由を「各国各理念と各国各ルール」ゆえに各国相対し闘争状態に陥るのは必至とし、「幸福的美徳」と「平和の価値」を説いた。何よりもアリストテレスは「武力闘争に対する合意形成の優先」を力説し、「報復の連鎖」か「平和的統合」かを選ばせたが、ヘレニズム期（ギリシア尊重期）のアレクサンドロス大王は聞く耳をもたず「ペルシャ軍への報復戦」を展開、カンダハル、バクトリア、ソグディアナ、サマルカンドまで残虐な戦いを続け、内紛で決闘まで生じたが、唯一の例外は文化に上下なく、兵士らの反対を押し切って蛮族の娘ロクサネを正妃としたことだった。これは「学問」に現実的、論理的、実証的、科学的根拠を求め、エーゲ海を含むギリシア全域に文化の花が咲き誇った時期でもあった。

4. ゼノン（前335～263）は心の不受態を保ち自然と合致して生きることを理想とし、人間は別個の正義に照らして別個のポリス（都市国家）に分かれて生きるに非ず、<sup>あたか</sup>恰も共通の牧場に草食む羊の如く人類共通の自然法：普遍的理性（koinos nomos）の下に「単一秩序」を形成して生きるべし、と。公的な正義の基準は各ポリスの評価基準ではなく、ロゴスは皆に等しく賦与されており、正義の評価基準も万国共通（ピレネの彼方の正義は、ピレネの此方の正義と同一）である。後の自然法や神法の思想はストアのロゴスに由来しコスモポリスの発想という嚆矢は、アリストテレスを経てアレクサンドロス大王に至ったが、後にローマに引き継がれ、力の支配から神の支配へ移った。

5. エピクロス（前342～270頃）は認識の根源を感覚的知覚に求め、価値の根拠を快楽に求め快楽主義を提唱。快楽には最も基本の「胃袋の快楽」から…最高の「心の平静」（ataraxia アタラクシア）へと続き、快楽は善の原理で苦痛は悪の原理です。人は快楽ゆえに友を選び、友のためなら最大の苦痛も引き受ける。<sup>なま</sup>生の黄金の樹は緑色で理論はすべて灰色だ。快楽の追求は善ゆえに肉体の健康を維持する。心の平静に一切の選択基準と努力目標を設定すべきです。この思想はドーバー海峡を渡って、近世イギリスの社会契約論と功利主義に引き継がれ、今日に至っており、資本主義と運命を共にしている。

以上、僅かなヒントであるが、対立のあるところ、ソクラテスの問答法は有効である。武力によらず、理性的・平和的な解決策をとるべきです。

以上、古代ギリシアには、ソクラテスを初め、プラトンやアリストテレスなど「愛智」に秀でた重鎮が存在し、理想的な「社会的協力」に必須不可欠な「正義に適う仕組み」を模索し、さらにヘレニズム期に入ると、ゼノンやエピクロスなど過渡期を乗り切るための新たな「社会的協力」に必須不可欠な「<sup>い</sup>叡智」を授ける愛智者が活躍していた。いずれも、往時の歴史的背景を前提にすると、如何にも、<sup>い</sup>流石に、<sup>さ</sup>成程、…と正確な状況判断に相槌を打ちたくなり、今日、振り返って眺めるなら、彼らの解決策は、<sup>い</sup>いかにも混迷のジャングル時代に適合し、<sup>さ</sup>さすがに正しく生きる道案内を提示し、なるほど愛智の解には、論理的にも、倫理的にも、凄味がある、と感心した。